

# トーテミズムとしての血液型人間分類

Classification of people based on blood type as totemism

小山 由

〈abstract〉

The belief that there is a relationship between personality and ABO blood type has been widely accepted among people in Japan. Many researchers have studied this belief. However, the studies have given the wrong names to and definitions of the belief because they have not focused on its inherent theory. This study aims to show the actual theory for the belief while examining limitations in the previous studies. Further, the current study intends to name and appropriately define the belief.

This study identifies two misinterpretations in studies by psychologists while reviewing previous studies, and confirms that those fallacies can also be seen in the interpretation of the concept of totemism. Consequently, this study indicates that the belief about blood type is linked to Claude Lévi-Strauss' totemistic classification. The totemistic classification refers to the thinking that distinguishes between the human line and the totem line and matches subjects belonging to the totem line with those belonging to the human line.

Based on Claude Lévi-Strauss' totemistic classification, this study shows that knowledge of blood transfusions is related to the establishment of the belief about blood type, and that the belief links the relationship between each totem of ABO blood type with the relationship between each human group

perceiving people as owners of each blood type.

Finally, this study defines the belief as follows: by leveraging the knowledge of blood transfusion, the belief classifies all human beings into four groups according to their respective types of blood based on ABO blood typing, and matches the relationship between each ABO blood type based on blood replacement with the relationship between each human group. This study also names the belief: the classification of people based on blood type.

## 目次

- I はじめに
- II 先行研究の問題点
- III トーテミズムと血液型論理
- IV 各血液型人種の関係性
- V 血液型論理の起源神話
- VI 血液型論理の再定義と再命名
- VII おわりに

## I はじめに

日本では「血液型占い」や「血液型性格判断」と呼ばれる考え方が、人々に広く受容されてきたことがたびたび報告されてきた。それは学術的には「血液型性格関連説」「血液型気質関連説」「血液型ステレオタイプ」と呼ばれ、「ABO式血液型とその所有者の性格の間に関係があるとする考え」と定義されるものである。この思考は1930年頃に流行したもので、戦後にみられなくなったものが1970年代に再び流行したものだという。その思考が受容された状況は、現在においても容易に確認できる。

この血液型に関する思考を、学術的な分析対象として扱ってきたのは主に

心理学者であった。心理学者によれば、この思考は日本の近代化の過程において生み出された非科学的な誤った考えであり、それが現代においても多くの人々に使用されるのは、その思考の使用者の関心事に利益をもたらすからだと解釈される。しかし、その解釈の一部には誤謬がみられるように思われる。これまで血液型に関する思考を対象とした研究が数多く発表されてきたが、この思考は正確に理解されないまま、研究が積み重ねられてきたという状況があるように思われる。

本稿の目的は、従来の研究の問題点を検討しながら、血液型に関する思考に固有の論理的側面を明らかにすることである。これまで血液型に関する思考は研究者の採用する方法によって様々な名称で呼ばれており、統一的な名称は存在しない。そのため本稿では、その思考を暫定的に「血液型論理」と名づけて考察を行っていく。本稿は従来の研究で使用されてきたこの思考の定義と名称に不備があることを示し、適切な定義と名称を導き出すこともねらいに含めている。

## Ⅱ 先行研究の問題点

まず先行する血液型論理の研究を概観し、その問題点を明らかにしておきたい。血液型論理は主に心理学者に注目され研究が行われてきた<sup>(1)</sup>。それらの研究内容はアプローチの仕方によって、大きく分けて以下の四つに分類できる。

- (1) 血液型と性格との間の関連性を確認するもの。
- (2) 血液型論理の科学性を主張する人々の論証方法について検討するもの。
- (3) 血液型論理の歴史を調査するもの。
- (4) 血液型論理が人々に受容され、その状況が持続する要因について考察するもの。

これらの研究がどのような結論を提出しているのかは以下のようにまとめることができる。一番目の研究では、性格を判定する質問用紙の回答から得

たデータの分析が行われているが、血液型と性格の間に有意な関連はみいだされず、その統計上の関連性は否定されている [佐藤／渡邊 1992；詫摩／松井 1985；村上 2008]。二番目の研究では、血液型論理を提唱する人々が論拠とするデータの取り扱いとその提示方法が検討され、これらの主張に偏ったサンプルの選定やデータの改ざんといった方法論的・論理的な問題があるため、血液型論理は科学的実証性をもつ学説ではないと指摘されている [大村 1998；佐藤／渡邊 2005；村上 2008]。三番目の研究では、文献の調査から、戦前期の血液型論理の提唱者の主張やそれを取り巻く背景、また血液型論理が軍隊や知能テスト等に活用されたことが明らかにされ、現在の血液型論理の受容状況は戦前期の状況が復活したものとされている [大村 1998；松田 1991；溝口 1987、1990、1994]。四番目の研究では、血液型論理のもつ機能や内容についての検討が行われ、人間関係を促進するといった、その思考を使用する人々に役に立つ部分を多くもっているために、多くの人々に受容されその状況が持続していると説明されている [大村 1998；佐藤／渡邊 1992、2005；詫摩／松井 1985]。

これらの結論を総合すると、血液型と性格の関連性は統計学的には認められず、血液型論理の提唱者の論証は科学的実証性を欠いたものである。またその思考は日本の近代化の過程において生み出された迷信の残滓であり、それが現代においても多くの使用者を獲得しつづけるのは、使用者の生活にとって有益となる機能を多くもつためだと理解されている。

筆者の見解では、これらの研究の中で一番目から三番目の研究の方法には正当性が認められるが、四番目の研究にそれを認めることはできない。前者は血液型論理の科学性やその歴史を対象とするという点で、血液型論理そのものについての検証や分析となっているが、後者は血液型論理を論じているようにみえて、分析の誤りにより、ほとんどの研究が血液型論理そのものの考察となりえていないように思われるからである<sup>(2)</sup>。以下では具体的な研究内容を確認していくことで、その問題点を明らかにしていく。

四番目の研究の嚆矢となったのは、おそらく大村政男の研究であろう [大村 1998：233-235]。大村によれば、血液型論理の使用には FBI 効果がとも

なうという。FBI 効果は血液型論理のもつフリーサイズ、ラベリング、インプリンティングという三つの効果を略称したもので、フリーサイズ効果とは、各血液型の特徴を述べる言説がフリーサイズで誰にでもあてはまるためにその言説を知った人物は当たったと錯覚してしまうという効果を指しており、これはバーナム効果と呼ばれることもある [cf. 村上 2008 : 60-93]。ラベリング効果は、あらかじめ各血液型についての情報を知っているとその後の解釈がその情報に引きずられてしまうという効果を指しており、インプリンティング効果は、血液型による性格等の特徴の言説が「当たっている」と感じると実際にそのように行動してしまうという効果を指している [大村 1998 : 233-235]。大村はこれらの効果があるために、血液型論理が人々に受容されたと考えている。

四番目の研究には、血液型論理は科学的な評価基準に照らした場合、誤ったものだという前提があり、それにも関わらず血液型論理が人々に使用されるのはなぜかという問題を説明するものとなっている。このような理解は血液型論理をステレオタイプとして対象化する研究にもみられる。

ステレオタイプの定義は「或種の個人や集団や対象について既有されている諸意見」とされており、ステレオタイプ研究において、血液型論理は「血液型ステレオタイプ」と呼ばれ、「ABO 式〈…〉血液型によって人の性格が異なる信念」と定義されている [詫摩／松井 1985 : 15]。詫摩武俊と松井豊は血液型論理をステレオタイプの一種とみなし、大学生を対象に性格心理学で使用される質問用紙を使用し、その回答結果を検討することで血液型ステレオタイプの内容と機能について考察を行っている。詫摩と松井は、データから血液型ステレオタイプをもつ人々には、回帰的傾向、社会的外向性、親和欲求が高いという特徴があることをみだし、これらの特徴は「気分がムラがあるが人づきあいが好きで皆と一緒にいたがる性格特徴を表し」しており、「そううつ性性格類型にあてはまる」と述べている。そして、「そううつ性性格の人は人との交際が多くおしゃべりであるので、血液型ステレオタイプの話に接することが多く」、「世俗的な関心が高く、熟慮しない傾向があるので、根拠があいまいなステレオタイプを採用しやすい」と解釈し、そ

れが人づきあいを円滑化するために使用されていると指摘する。また血液型ステレオタイプをもつ人々は「権威に追従したい」という追従欲求が高く、「一見科学的にみえる血液型で人の性格を分けて理解するという行為の背後」には「権威体系に頼って複雑な思考判断を避けたいという心理が潜んでいる」と解釈している〔詫摩／松井 1985：28〕。

このように四番目の研究では、血液型論理の機能や効果を検討することで、人々がいかなる理由でその論理を用いているのかを特定することが目的とされている。佐藤達哉は、そのような機能を総合的に取り扱った研究を発表している。

佐藤は、「血液型性格関連説がなぜ日常生活に欠かせない話題として定着しているのかを考察するために」〔佐藤／渡邊 1992：248〕、その話題のもつ機能について論じている〔佐藤 1993；佐藤／渡邊 1992〕。佐藤は、血液型性格関連説は個人を扱う理論であると同時に対人関係をも扱う理論でもあるとして、両者を区別して論じている。個人理論には「性格判断機能」「血液型判断機能」「性格推測（行動予測）機能」「（行動の）原因説明機能」があり、対人関係理論には「相性判断機能」「血液型判断機能」「相性予測機能」「相性説明機能」があるという。個人理論の性格判断機能は「○型の人△な性格だ」と述べるができる機能を指しており、血液型判断機能はその反対に「あの人は△な性格なので○型だ」という機能を指している。また性格推測機能は「あの人は○型なので△になる（をする）」というような機能を指し、原因説明機能は「あの人が△なの（するの）は○型だからだ」という機能を指している。対人関係理論の相性判断機能は「○型と×型の相性は良い」と述べるができる機能を指しており、血液型判断機能はその反対に「○型のAさんとうまくやれるなんて、Bさんは×型に違いない」という機能を指している。また相性予測機能は「Aさんは○型で、Bさんは×型なので二人はうまくいく」という機能を指し、相性説明機能は「AさんとBさんがうまくいくのは血液型が同じだからだ」という機能を指している〔佐藤 1993：201；佐藤／渡邊 1992：248-249〕。また、佐藤は血液型性格関連説が「機能豊富であるので初対面の相手に対しても安心して持ち出せる話題

であり、「血液（型）は、会話の成員全ての人々が持っており、誰もが話題の中心になって会話が弾み関係が促進されるという利点もある」と述べている〔佐藤／渡邊 1992：248〕。

以上、三つの例を挙げて血液型論理に関する四番目の研究について確認したが、これらの研究における血液型論理の解釈には、二つの論理的な欠陥を指摘することができる。一つは、人々の血液型論理の受容やその持続の説明において、欠点と解釈しうるような側面が看過されている点にある。先の研究では、血液型論理は科学的には誤った思考であるにも関わらず、使用者の役に立つ機能があるために用いられ、この思考が受容される状況が持続するのだと解釈される。しかし血液型論理には、はじめから各血液型の所有者間に相性というものが設定されており、後述するように、A型の人間とB型の間は相性が悪いとされる思考なのである。つまり血液型論理には、人間関係の断絶や対立関係が設定されているのだが、先の研究ではこのような点は触れられていない<sup>(3)</sup>。しかし、血液型論理の使用における利点と欠点を総合的に取り扱わなければ、血液型論理の受容とその持続を説明したことにはならないだろう。

もう一つの問題は、先の解釈が血液型論理以外の思考においても確認できる点にある。先に挙げた機能は、例えば、「星座占い」と呼ばれている思考にもみいだせる。この思考においても「さそり座の人は一途な性格だ」「あの人は一途な性格だからさそり座にちがいない」といわれるのであり、先に確認したような血液型論理の機能は全て星座占いの思考にもみいだせる。こうした機能の一部は、血液型論理や星座占いに限らずそれ以外の思考においても確認できる。例えば、「男だから鈍感だ」「こんなところで騒ぐなんて（まるで）子どもだ」というように、性別や年齢という分類基準においても確認できるものなのである。また、血液型論理の機能として挙げられたものの一部は、研究者の言説においても確認できるものであることを指摘しておく。例えば、原因説明機能は「彼が血液型論理を信じるのはそれが原因説明機能をもっているからだ」と述べることができ、血液型判断機能は「彼女は追従欲求が高いので、そううつ性性格だ」と述べることができる。つまり、

先に挙げられた諸機能は、人間を分類する際に使用される思考一般に確認できるものである。この解釈に説得力をもたせようとするならば、抽出された機能が血液型論理の受容と持続にどのように関わっているのかを具体的に示さなければならない<sup>(4)</sup>。

このように、四番目の研究には、血液型論理の使用にともなう利点のみを取り上げて欠点について論じないと同時に、他の分類思考にも確認される一般的な機能を血液型論理のみに適用することで、この思考の受容と持続を説明しているという問題がある。だがおそらく、このアプローチから導き出せるのは、血液型論理が他の人間分類思考に比べて、全ての分類項が互いに関連しあっているという、際立った体系性の存在が確認できるということぐらいだろう。だが、その体系性も星座占いとほぼ同等のものであり、それのみを特別に取り上げて論じる必要はない。

従来の研究の問題点は、人間に適用される分類思考の一事例である血液型論理を「非科学」というカテゴリーに含めて論じてきたことに由来しているように思われる。このような状況には、血液型の知識が優生学に活用されたことや、血液型論理がその提唱者たちに科学的な思考だと主張されてきたという歴史が関わっているのであろう。しかし、「科学」に対置される「非科学」というカテゴリーは、「科学以外のもの」というタグ付けによって対象を集合させるものであり、そこに含められるものは共通点を欠いたものの寄せ集めにすぎない。この頭陀袋のようなカテゴリーを基準としてその内容物の分析を行ったとしても、そこからは「科学的ではないもの」という徴候しかみいだせないだろう<sup>(5)</sup>。「科学／非科学」という概念区分は、血液型論理の性質を対象とする研究を行う上では有効でないばかりか、その理論的發展を阻害するのである。

では、血液型論理をどのような思考として取り扱えばよいのだろうか。次節からはその点について論じていく。



### Ⅲ トーテミズムと血液型論理

本節ではトーテミズムと名指しされた思考を主に取り扱う。トーテミズムに対する研究者の理解と血液型論理のそれとが類似していることを確認し、血液型論理がトーテミズムと同種の思考様式であることを示すためである。また同時に、トーテミズムに関する問題を解決した先行研究の解釈を通して、血液型論理がいかなる思考であるのかを同定していく。

トーテミズムとは、氏族などの人間集団が特定の動植物と特別な結びつきをもっているとする信仰、およびそれに基づく制度であり、その特定の動植物を指してトーテムという。特別な結びつきには、例えば、氏族がその動植物と同じ特徴をもっている、その動物が氏族の先祖である、集団の成員とその動物は互いに殺さない親密な関係がある、といったものが挙げられる。トーテミズムは19世紀後半から20世紀前半の学者たちによって、未開人特有の思考であるとか科学的思考の前段階の思考として理解されてきた。

血液型論理との類似点を示すために、まずトーテミズムの定義との比較を行う。ラドクリフ＝ブラウンが挙げたトーテミズムの定義は、「一つの社会がいくつかの集団に分かれ、各集団と一つないし複数の対象物—それは通常は動物ないし植物のような自然種であるが、時には人工的なものあるいはある動物の一部分であるかもしれない—との間に特別の関連がある」[ラドクリフ＝ブラウン 2002：159-160] とする考え方というものである。これは心理学者の「ある人の ABO 式血液型とその人の性格に関連があるという考え方」[佐藤／渡邊 1991：159] という定義と類似する。それらは、人間集団（氏族や特定血液型所有集団）が特定の対象物（動植物や血液）と結びつきをもつと理解される思考なのである。

次にトーテミズムがどのように解釈されるかを確認してみよう。マリノフスキーは、なぜ未開社会の人々がトーテムとして限られた特定の動植物を選択するのか、その選択の原則とはいかなるものであるのかということを開き [マリノフスキー 1997：55]、以下のように論じている。

未開人は、獣たちの外見や特性に深い関心を抱く。彼は動物たちを手に入れたい、つまり、役に立つかあるいは食用になるものとして統御したいと思う。時には、それを賛美し、恐れたりする。こうしたあらゆるものの関心が一体となってお互いを強めながら、ある一つの結果を生みだす。それは未開人の主要関心事である、ある限られた数の種の選択であり、その種としてはまず動物が、続いて二番目には植物が挙げられるが、これに対して無生物や人工物は間違いなく二次的なもので、動植物に対して類推を導入した結果に過ぎず、トーテミズムの実質とは何の関係もない。／トーテム種に対する人間の関心の特徴はまた、そこで望ましいとされる信仰や崇拜の方をはっきりと示している。この関心は、危険であったり、食用になったり、何かの役に立つ種を統御したいと思う欲望だから、種に与えられている特別な力やそれとの類縁性、人間と動植物に共通な根本的要素を信じることにつながるに違いない。[マリノフスキー 1997: 57-58]

ここでは特定のトーテムが「未開人」によって選択される理由は、「役に立つかあるいは食用になる」ためだと説明されている。しかし、この解釈には論理的欠陥がある。例えば、オーストラリアのアランダ族は四百種以上の異なる動植物をトーテムとしているが、この解釈では有用な動植物として選択されるトーテムが重複しない理由が説明できない。また、人工物や生理現象等（短刀、割れビン、睡眠、下痢、嘔吐等）がトーテムになる例もあり、マリノフスキーの解釈では、その他の動植物に比べて有用と認めがたいこれらのものを例外として扱っているが、多数の例外をもつ解釈は齟齬をきたしていることになるだろう。このようにトーテミズムを有用な機能という側面から解釈しようとする議論は、血液型論理に対しての心理学者の解釈と同様の誤謬がみいだせる。

両者の定義は共に「人間集団が特定の対象物と結びつきをもつ考え」というものであり、またそれらは共に、その思考の使用者にとって有用な関心事（食料や人間関係の維持・促進）の利益を引き出すために使用されている、

と解釈される点が類似している。もしこれらを同種の思考様式だとみなすことができるならば、トーテミズムの問題を解決した議論は、血液型論理の理解の手がかりとなるだろう。

トーテミズムの問題に、決定的な解答を提出したのはレヴィ＝ストロースである。レヴィ＝ストロースは、トーテミズム概念が未開人特有の思考様式として恣意的に操作されて成立したものであることを指摘し [レヴィ＝ストロース 1970、1976]、それを人類に普遍的にみられる分類思考だと位置づけなおして、トーテム的分類という名称を与えている [レヴィ＝ストロース 1976：160-163]。レヴィ＝ストロースによればトーテム的分類とは、トーテムとされる動植物などの自然種を「自然の系列」に属するものと、氏族などの人間の集団を「文化の系列」に属するものとに分け、その二つの系列間で対象を対応させる（照応する）思考様式であるとされる。その思考操作には二通りのやり方があり、一つは「自然の系列」に属するトーテム種の一種族と、「文化の系列」に属する人間集団の一集団を対応させる方法であり、もう一つは自然の系列に属する「種と種の差異から生じる関係性」と、文化の系列に属する「人間集団と人間集団の差異から生じる関係性」という二つの関係性を対応させる方法であるという [レヴィ＝ストロース 1976：136-137、269]。例えば、前者は「人間集団1は熊のごとく、人間集団2は鷺のごとし」、後者は「人間集団1と人間集団2の差異は、熊と鷺の差異のごとし」と表現できるものであるという。

レヴィ＝ストロースの挙げた例をみてみよう。前者の方法は以下のように説明される。アメリカのチッカソー族が語った話によれば、ピューマの氏族の人々は山中に住み、水を恐れて避け、主に狩りの獲物を食べるとされ、赤狐の氏族の人々は泥棒が専門で、束縛を嫌い、森の奥に住んでいるとされていたという。これらの氏族の特徴は、「自然の系列」に属するピューマや赤狐というトーテムの行動特性を「文化の系列」に属する氏族に対応させたために生じたものである。その対応の仕方は「氏族1はピューマのごとく、氏族2は赤狐のごとし」というものになる [レヴィ＝ストロース 1976：139-141]。

後者については以下のような例から説明されている。オーストラリア先住民社会には双分組織があり、社会が二つの半族と呼ばれる親族集団に分かれているが、その半族の名称が二つの鳥の種類になっていることが多い。例えば、ニュー・サウス・ウェールズ地方のある部族では、二つの母系半族はタカとカラスと呼ばれて区分されている。レヴィ＝ストロースによれば、半族の名称に使用されている鳥の種は同じ「鳥」のカテゴリーに属しており、同時に対称的に対立しているという。タカとカラスは共に肉食の鳥であるが、前者が獵をする鳥であるのに対して、後者は腐肉をあさる鳥であるという点で異なる。タカとカラスが半族の名称として使用されているのは、それらの鳥の種が同じ「鳥」カテゴリーに属しながらも対称的に対立していることを示す記号となっており、同じ部族社会に属しながらも対称的に対立する二つの集団の関係を表すのに適しているためであるという。これは「氏族1と氏族2の差異は、タカとカラスの差異のごとし」と記述できる〔レヴィ＝ストロース 1970：136-145〕。

レヴィ＝ストロースは、トーテム的分類が人類に普遍的にみられるものと述べているので、身近な例を挙げてそのことを示そう。前者は、例えば、「人間集団1は犬に似ている。人間集団2は猿に似ている」というものである。日本では「犬の遠吠え」や「猿芝居」という表現があるので、これを前者の思考にあてはめると、人間集団1に属する人々は「臆病者で、陰で虚勢を張る人々」、人間集団2の人々は「すぐにばれてしまうような浅はかな企み事をする人々」という意味になる。一方、後者は「人間集団1と人間集団2の関係は、犬と猿の関係に似ている」というものである。日本では犬と猿の関係を表現するのに「犬猿の仲」という表現があるので、これを後者にあてはめると、「犬と猿の関係のように、人間集団1と人間集団2は非常に仲が悪い関係」という意味になる。これを日常的な会話用法に即して記述すると「あの二人はいつもケンカばかりしていて、まるで犬と猿みたいだ」というものになる。このように、トーテム的分類は一般的に使用される比喩表現に確認できるものである。

レヴィ＝ストロースは、トーテミズムを動植物等と対応させることによつ

て人間を分類するトーテム的分類の一事例として位置づけている。その分析に基づけば、定義や解釈がトーテミズムと類似する血液型論理もトーテム的分類であると推測することができるだろう。もし血液型論理をトーテム的分類の一事例として捉えることが可能であるならば、先の例と同様に、血液型論理の内容は「自然の系列」と「文化の系列」との対応関係を確認することで明らかになるはずである。

ただし、血液型論理のトーテムである「血液」には、A型、O型といった名称程度しかその特徴を示すものがない。このことから「赤狐の氏族の人々は泥棒が専門である」というような前者の方法は採用できないことがわかる。したがって血液型論理は、トーテム的分類における思考操作の後者の方法を採用しており、トーテム間の関係性と人間集団間の関係性との照応が思考の枠組みとなっていると推測できる。

次節からは「自然」と「文化」という二つの系列の各項の間にみられる関係性をそれぞれ確認していくことにする。

#### IV 各血液型人種の関係性

まず、血液型論理において、「文化の系列」に属する人間集団の間には、相互にいかなる関係性があるとされているのかを確認していこう。

血液型論理における各血液型集団の関係性について具体的に考察を行っているのは、管見のかぎりでは、文化人類学者の板橋作美のみである。板橋は古い一般について論じた著作の中で、血液型論理について考察を行っている[板橋 2004]。板橋はある血液型本に載せられた相性表を確認し、そこから同じ血液型の相性が悪いこと、A型とB型の人、O型とAB型の人との相性が悪いことを発見し、二組の対立関係をみいだしている<sup>(6)</sup>。板橋によれば、A型の人とB型の人との対立は「暗い／明るい」「消極的／積極的」の二つの対立によって記述され、O型の人とAB型の人との対立は「情熱的／クール」「行動的／非行動的」の二つの対立によって記述されているという[板橋 2004 : 56-59]。

板橋はこの二つの対立がいかに生じているかについても論じている。血液型論理の前提には「血液型を構成する要素は A と B の二つであり、A だけでなっているのは A 型、B だけでなっているのは B 型、そして両方ともあるのが AB 型、どちらもないのが O 型、という考え方」があり、AB 型と O 型の人は「それぞれ A 型と B 型の全肯定と全否定という組み合わせになっている」ために対立しているという。また AB 型の人が「複雑な性格の持ち主とされ、繊細、デリケート、また個性的、個人主義的などとされるのは、A 型と B 型という相反する性格の両方をあわせもっていることの結果」であり、O 型の人は「どちらの性格ももっていないとしたら、単純明快な性格で、よく言えばおおらかな人、悪く言えばガサツな人、ということになる」と説明する [板橋 2004 : 61-62]。このように解釈したうえで、板橋は以下のような結論を述べている。

要するに、各血液型の意味づけは恣意的なのだ。A 型と B 型のどちらにプラスの価値をあたえるかは、逆転することがあり、逆の方にその価値をあたえてもよい。それに、そもそも A 型と B 型の違いを、たがいに反対の価値をもつ対立ととらえること自体に根拠がない。対立ではなく、単なる違いにすぎないかもしれないのだ。さらには、A 型と B 型が対立するとしても、その対立に積極的・消極的という別の対立を重ねることに根拠はない。例えば犬好き対猫好きという対立につながってもよいはずだ。どうとでも言えるのである。[板橋 2004 : 69-70]

ここで板橋は各血液型の人々に与えられる意味づけは恣意的に決定されたものであり、さらには A 型の人々と B 型の人々、O 型の人々と AB 型の人々の間にある二つの対立関係にも根拠がないと述べている。たしかに各血液型の人々の特徴には無根拠に決定されたものもあるようだが、しかしそのことが「A 型と B 型の違いを、たがいに反対の価値をもつ対立ととらえること自体に根拠がない」ことを示すことにはならない。筆者の考えでは、対立関係を示す各血液型集団の特徴にはいくらかの恣意性はみいだされるが、対

立関係そのものには明確な根拠がある。

そのことを論じていくために、以下ではまず血液型論理が実際にどのようなように記述されているのかを確認する。それからその記述の分析を行い、各血液型集団間の関係性やそれらの特徴を示す言説を示したうえで、血液型論理が無根拠に成立したのではなく、その思考の体系を成立させた明確な原理が存在することを示す。

まず、各血液型の人々の特徴が記された資料を確認しよう。資料は女性雑誌に掲載された記事である。長い文章になるが、恣意的な引用を避けるため全文を挙げる。

A型「欲求よりも協調性を優先する勤勉タイプ。孤独に弱く、心配性な一面も。」／村での定住生活を営む農耕民族がルーツとされるA型は、個の欲求や都合より協調性を優先し、社会人としての意識が高いのが特徴。勤勉でマジメ、几帳面といった、いわゆるA型のイメージとはかけ離れた人でも、決まり事はキチンと守り、グループの総意に従って行動する習性を身につけています。／それは単独で生きていくことがいかに厳しく寂しいか、そして危険であるかを、種の本能で知っているから。秩序やルールを重んじるのも、スクエアな性格の表れというより、無用の混乱を避けるため。しっかり者に見えて、実は人一倍孤独に弱く、心配性なのです。モメ事や争いが苦手で、我慢とストレスをため込むキライも。気の病が高じてのうつ、胃痛や片頭痛、不定愁訴の慢性化には要注意。／恋はロングスパン。ピュアな愛を一心に捧げるものの、オクテで相手の気持ちに確証が持てるまでは前に進めず、成就までに時間がかかりそう。でも、ひとたび結ばれば、揺るぎない絆を育てて結婚へとまっしぐら。／金銭面は計画性抜群。若いときからコツコツ貯金に励み、夢や目標の実現にあてる堅実派が多いはず。でも一度のつまずきがモトで、坂道を転がり落ちる恐れが。借金財政は鬼門。[オフェリア 2009: 24-25]

B型「自由気ままなキャラ。心を動かされると、後先も損得も考えず親身になるお人よし。」／総じて“自分らしさ”と“今この瞬間”を大切にするのが、B型に共通の特徴といえそう。表向きのタテマエや体裁を繕うどころか、周囲に合わせることもまれ。過去にこだわるでなく、未来を憂えるでなく、その時どきの胸に宿る思いや感情に従い、あくまでも自分に正直に行動します。そんな自由気ままな生き方、個性的なキャラクターを、世間からは“気まぐれ”“身勝手”“KY”などと批判されがちなB型。でも、それは、自分らしく振る舞えない人々によるひがみであることが往々にして。／現に、大多数のB型は情にモロく、心を動かされると後先も損得も考えず親身になるお人よし。とはいえ、お世辞や嘘がヘタで、思ったことをまんま口にするため、人間関係は敵と味方が歴然と。ルールに縛られる大きな組織や団体行動にも不向き。／愛情面には、持ち前の衝動性が顕著に表れます。惚れっぽい上、自分の気持ちを隠しておけないタチ。異性としての魅力を感じた途端、好意が言葉や態度ににじみ出て、誰が見てもそれとわかる勢いで熱愛モードへ。モラルやプロセスにもとらわれず、奔放に恋を謳歌することに。ただ、常に変化と刺激を求めるサガゆえ、熱しやすく冷めやすい点がウィークポイントです。[オフェリア 2009：28-29]

O型「スタミナ、精神力がとにかく断トツ！ 自己顕示欲も強くて、恋愛はかなり情熱的。」／O型生まれは、プリミティブな血液型だけあって、例外なくタフ。何でも美味しく食べるグルメ派から肉体美を誇るボディビルダーまで、スタミナ、精神力とも断トツです。性格も変容性に富み、多士済々。あえて大別するなら次の3分類に。／最も典型的なO型は、原初的な生命力の強さと闘争本能を体現する、パワフル系。見るからに、エネルギーでバイタリティにあふれ、自己顕示欲も旺盛。目的のためには精力的に活動し、ガンガン攻めて勝ちにいくほう。／次いで多いのが、明るく陽気なラテン系。細かいことにこだわらず、サクセスにあくせくするより、人生を謳歌したいクチ。そのための



才を生まれ持った、天与の芸術家も数知れません。／残る一タイプは、おっとりして包容力があり、愛情豊かな癒し系。すべての血液型に輸血できるO型の特性同様、どんな相手や環境にも馴染み、そのおおらかさで多くの人に慕われます。／金銭感覚は、アバウトに見えて意外にちゃっかり&しっかり者。レジャーや自己投資にバンバン使っているようでも、陰ではちゃんと貯め込んでいるはず。／恋愛観はホット&パッション。好きになったら情熱の全てを注ぎ、あの手この手で押しまくって打っちゃりそう。[オフェリア 2009：32-33]

AB型「性格気質に二面性が。天性の社交家ながら、親しい人とも一定の距離をキープ。」／2つの血液型因子が合わさって出現したとされるAB型は、性格気質や志向に二面性を宿しているのが特徴です。例えば、自我が強く個人主義的なB型の側面と、A型的な繊細さや社会性を兼ね備えているとか…。そして、自分自身のコアな領域を侵されないように、社会的でスマートなペルソナによって、自己防衛的システムを進化させています。そのため、たいていは誰に対してもソツなく振る舞い、好ましい関係を築く天性の社交家に。それでいて、自分の内面に踏み込まれることを嫌い、親しい人とも一定の距離をキープするのも、そうした背景があるせい。／また、自身の異なる人格を使い分けることに慣れているせいか、要領が良く、物事を合理的に割り切るのが得意。何事にも器用にこなすセンスとカンの良さは、AB型ならではの特質です。半面、自己矛盾を抱えやすく、何かに打ち込んでいても、どこか醒めた目や迷いがつきまといがち。何を考えているか分からないなどと思われるのも、そんな客観的のゆえといえそう。／愛情面では、激しい情熱より知的なカケヒキや精神的なふれ合いを重視するタイプ。お互いに自立した大人の関係を望み、交際のスタイルや結婚の形にこだわらない進歩的な一面も。[オフェリア 2009：36-37]

これらの記述においても板橋が指摘した対立関係の記述が確認できる。そ

れはまず A 型人種<sup>(7)</sup>と B 型人種の特徴が対立的に描かれている点にみいだされる。A 型人種は「個の欲求や都合より協調性を優先」し「秩序やルールを重んじる」人々とされ、B 型人種は「その時どきの胸に宿る思いや感情に従い、あくまでも自分に正直に行動」し「ルールに縛られる大きな組織や団体行動にも不向き」な人々とされている。このことから両者は「秩序／無秩序」「集団／個人」という対立的な記述がなされていることが確認できる。また A 型人種は「恋はロングスパン」で「金銭面は計画性抜群」であり、B 型人種は「情にモロく、心を動かされると後先も損得も考えず親身になり」「愛情面には、持ち前の衝動性が顕著に表れ」というように「計画／無計画」「規範／感情」という点にも対立的な記述がみられる。

また板橋が指摘するように、対立的な記述は O 型人種と AB 型人種の特徴の記述においても確認できる。引用した記事では、O 型人種は「恋愛観はホット&パッションート。好きになったら情熱の全てを注」ぎ、AB 型人種は「愛情面では、激しい情熱より知的なカケヒキや精神的なふれ合いを重視」とされており、これらは「情熱／冷静」や「本能／知性」という対立に整理できる。また O 型人種は「おっとりして包容力があり」「どんな相手や環境に馴染み、そのおおらかさで多くの人に慕われ」るのに対し、AB 型人種は「社会的でスマートなペルソナによって、自己防衛的システムを進化させて」いるために「自分の内面に踏み込まれることを嫌う」とされる。これらの記述からは「開放／閉鎖」という対立が確認できる。

また板橋は指摘していないが、引用した記述からは O 型人種と AB 型人種の共通点も確認できる。O 型人種は「どんな相手や環境にも馴染み、そのおおらかさで多くの人に慕われ」とされ、AB 型人種は「誰に対してもソツなく振る舞い、好ましい関係を築く天性の社交家」とされている。これらは両人種のいずれもが高い社交性を持った人々として記述されている点で共通している。また、両者の記述は多様性や両義性という観点からも共通点をみいだすことができる。O 型人種は「性格も変容性に富み、多士済々」であり「原初的な生命力の強さと闘争本能を体現する、パワフル系」「明るく陽気なラテン系」「おっとりして包容力があり、愛情豊かな癒し系」とい

う三つの型に区別されてその特徴が記述されている。また、「金銭感覚は、アバウトに見えて意外にちゃっかり&しっかり者」と記述されているように特徴が首尾一貫していない。そのような特徴の多様さや曖昧さは、AB型人種では「性格気質や志向に二面性を宿している」という記述と「誰に対してもソツなく振る舞い、好ましい関係を築く天性の社交家に。それでいて、自分の内面に踏み込まれることを嫌」うという記述から確認できる。つまりO型人種とAB型人種は、「社交性」「多様性」「両義性」という特徴をもっているという点で共通している。このような共通点はA型人種とB型人種の記述にはみられないものである。

いま確認してきたことを整理すると、血液型論理における「文化の系列」には、(1) A型人種とB型人種の対立関係、(2) O型人種とAB型人種の対立関係、(3) O型人種とAB型人種の類似関係、という三つの関係性があることが確認できた。このような情報は、従来の研究ではほとんど注目されず、また注目された場合にも無根拠に設定されたもののだとしてその価値が認められてこなかった。しかし、筆者の見解では、これらの関係性は血液型論理が成立した根拠をみいだすために必須のものである。

## V 血液型論理の起源神話

前節では、「文化の系列」に属する人間集団間の関係性をみてきたので、次に「自然の系列」に属する血液というトーテム間の関係性を確認していこう。以下に引用するものは、1943年5月21日付の『読賣新聞』朝刊に掲載された記事である。

大人の血液は體重の十八分の一—二十分の一で普通四—五リットルを占め、その半分、時には三分の一を失ふと生命に影響します。重患や怪我で急に多量の出血をした場合輸血で／生命を取止めることはよく知られてゐます。最近では危険な作業を行ふ工場などでは不意の事故に手遅れなく輸血療法に應じうるやうにと工具の血液型を前以つて調べてみると

ころもあります。空襲その他救急を要する事態に備へて各自自分の血液型を調べておくのもぜひ必要です。血液型には A 型、B 型、O 型、AB 型の四つがあつて家族でも同じとは決つてゐません。／輸血には、自分が輸血して貰ふ場合と人に與える場合とが考へられますが、その合せ方は、／A 型 = A 型又は O 型／B 型 = B 型又は O 型／O 型 = O 型／AB 型 = 何れでも可／となつています。それでもし A 型の人が輸血を受けるときは A 型か O 型の人の血に限り、もし O 型の人が輸血を受けるとすれば同じ O 型の血しか役にたゝぬこととなります。しかし O 型の人の血は A、B、O、AB 型何れの人にも役立つ譯です。[読売新聞 1943]

これは戦時下に、輸血の必要が生じた時のためにあらかじめ血液型を検査しておくことを国民に呼びかける目的で書かれた記事だが、ここでは「血液」というトーテムの関係性が輸血学の知識によって説明されている。前節で引用した雑誌記事の O 型人種の記述に「すべての血液型に輸血できる O 型の特性」とあるように、血液型論理の体系には輸血学の知識の影響があることがわかる。

この資料には「自然の系列」の各トーテム間の関係性が記述されている。トーテム分類の思考を適用すると、トーテム間関係性は次のように読みかえることができるだろう。

「自然の系列」に属する血液の世界には、A 型、B 型、O 型、AB 型と名づけられた四種類の異なる種族が存在している。これらの種族には根源的に定められた相性というものがあり、その種族の成員たちが接触すると生命力が増強する場合もあるが、反対に生命力が減退してしまう場合もある。彼らが自身の一部を他の種族の成員に渡した場合にも同様の原理が働き、相手の生命を奪つたり、与えたりする。そのような物質が人間の身体の内には存在している。おそらく輸血学の知識はこのような物語として人々に受容されたと推測される<sup>(8)</sup>。

輸血学の知識から、受血と給血という血液の交換関係を整理すると以下のようなになる。

- (1) A型はA型とAB型に給血でき、A型とO型から受血できる。
- (2) B型はB型とAB型に給血でき、B型とO型から受血できる。
- (3) O型はA・B・O・AB型に給血でき、O型から受血できる。
- (4) AB型はAB型に給血でき、A・B・O・AB型から受血できる。

この規則では、同種のトーテムの場合は全てのトーテムで血液の交換が可能だが、他のトーテムの場合ではその交換関係が異なっている。

血液というトーテム間の関係性を確認してきたが、トーテムの分類の論理にしたがえば、トーテム間の関係性と人間集団間の関係は対応するはずである。事実それらは対応することが確認される。前節で整理した、各血液型人種間の関係性は以下のように解釈できるだろう。

なぜ、A型人種とB型人種は対立的に記述されるのだろうか。それは血液という「自然の系列」の領域においては、それぞれが全く接点をもたない関係はA型とB型の関係に限られているという理由による。血液を交換できない関係は全てのトーテムに存在するが、A型とB型の関係のみが相互にやりとりできない関係である。各トーテムが他のトーテムと関わる組合せは六つあるが、その中で接点を全くもたない組み合わせはA型とB型の関係のみである。このことは、両者の関係が全ての関係性の中で、相対的に最も距離の隔たった関係であり、そのために一つの軸の極限に位置づけられ(磁石のN極とS極のように)、相反する特徴を与えられることになったということを示している。したがってトーテムと同様に、その所有者であるA型人種とB型人種の関係も、相対的に最も距離の離れた関係であり、それゆえに正反対の特徴をもち、対立的に記述されているのだと解釈することができる。

では、O型人種とAB型人種の対立関係はいかに解釈できるだろうか。それはO型トーテムとAB型トーテムの交換関係が反転した枠組みをもっているためである。O型が全ての種族に血液を与えることができ、どの種族からも血液を受け取ることができないのに対して、AB型はどの種族にも与えることができないが、全ての種族から受け取ることができる。この反転した交換関係が各々の血液型の所有者にも適用されるため、O型人種とAB

型人種は対立的に記述されている。また兩人種の交換関係から、O型人種の「どんな相手や環境に馴染む」という特徴と、AB型人種の「自己防衛的」だという特徴も理解することが可能になる。

一方で、O型人種とAB型人種は、社交性、多様性、両義性といった共通する性質をもっている。これはどのように解釈できるだろうか。この問いは、レヴィ＝ストロースの神話解釈についての議論を借りて説明を試みたい。レヴィ＝ストロースは、神話において二項対立が生じた場合、その対立がいかに解消されるかを「媒介」という概念を用いて説明している。レヴィ＝ストロースによれば、対立する項がある時、それを調停させるには二つの方法があるという。一つは両者を近づけてはじめての矛盾や対立をなくす方法であり、もう一つは両者を離れたままにしておいてどちらも異なるがどちらにも関係がある第三項を両者の間に導入する方法であるという [レヴィ＝ストロース 1979: 78-79]<sup>(9)</sup>。

血液型論理では後者の方法が採用されていると考えることができる。O型人種とAB型人種のもつ社交性、多様性、両義性といった共通点は、兩人種の所有するトーテムが、極限に位置づけられたA型とB型から等しい距離に位置づけられており、「どちらも異なるがどちらにも関係がある第三項」として、それらの断絶した関係を取り持つことができることに由来している。O型人種が「性格も変容性に富み」「包容力があり、どんな相手や環境に馴染む」とされ、AB型人種が「自分の内面に踏み込まれることを嫌うにも関わらず「誰に対してもソツなく振る舞い、好ましい関係を築く天性の社交家」されるのは、兩人種がA型トーテムとB型トーテムの対立を調停するトーテムを所有するからだ」と解釈できる。これは身近な例では「縁の切れ目は子どもがつかぐ（子は鏝）」という諺で示される思考と同種のものである。

以上の確認を通して血液型論理の体系には明確な根拠があることを示せたいと思う。血液型論理は、輸血学の知識に依拠することで、血液の世界のトーテム間の関係とその所有者である人間集団の関係を対応させる思考方法である。

ただし、血液型論理には輸血学の知識以外の原理が関わっていることにも注意する必要がある。例えば、先に引用した記事の「村での定住生活を営む農耕民族がルーツとされる A 型」や「O 型生まれは、プリミティブな血液型」という記述にみられるように、各人種は「農耕／牧畜／狩猟採集民族」や「原始的／現代的」という分類によって説明されることがある。また筆者は、「O 型（の人）は、オーざっぱでオーらか（大雑把でおおらか）」という表現を聞いたことがあるが、これはトーテムの名称から血液型の特徴を説明するものである。これらの例が示すように、各人種の特徴を規定する原理を一つに還元することはできない。

血液型論理はその発生から百年近くを経ており、複数の原理が混淆しながら現在まで残存してきたと推測されるため、一つの原理のみを特権化して論じることには問題がある。しかし、輸血学の知識の普及期と血液型論理の流行した時期が、ほぼ同時期であることを考慮するならば、血液型論理の体系の成立に輸血学の知識が深く関わっているのは想像に難くない。しかし、これまでこの問題は対象化されてこなかったのである。

## VI 血液型論理の再定義と再命名

最後にこれまで述べてきたことをふまえて、血液型論理の定義と名称を新たに設定してみたいと思う。まずこれまでの定義にはどのような問題があるのかを確認しよう。従来は「ある人の ABO 式血液型とその人の性格に関連があるという考え方」〔佐藤／渡邊 1991：159〕や「ABO 〈…〉血液型によって人の性格が異なる信念」〔詫摩／松井 1985：15〕といった定義がなされてきた。また、「『ABO 式の血液型によって人の性格はもとより職業適性や男女の相性などを見分けることができる』という考え方」〔菊池 1999：106〕というように、血液型とその所有者の関連性の幅をいくらか広げた定義もある。

しかし、これらの定義には血液型論理が規定する各血液型人種の特徴の側面にしか触れていないという問題がある。これまでほとんど無視されてき

たが、血液型は、個人（血液型集団の成員）の性格、職業適性、相性といったもの以外にも、外面的特徴 [能見 1983 : 44-47]、特定の病気の罹りやすさ [能見 1998 : 154-155]、摂食に適した食材 [ダダモ 1998] 等と関係があるとされている。いま挙げたものは、人間の身体的側面に関わるものであり、これらは血液型が個人の心理的側面とともに生理的側面にも関係があることを示唆している。このことから血液型論理が血液型との照応によってその所有者の全体の特徴を規定する思考であることがわかるだろう。

従来の研究ではこの重要な側面が無視されてきたが、その重要性を認めることができなかつた理由は、血液型論理が科学的思考を使用できない人々が信じる思考だと理解され、その固有の論理を詳細に検討する意味がないと思われてきたためだろう。しかし、すでにみてきたように血液型論理の成立には明確な根拠があり、首尾一貫した論理が存在している。このことを組み込まなければ、血液型論理をめぐる定義と名称には不備が生じることになるだろう。

前節で確認したように、血液型論理は、ABO 式血液型間の関係性とそれらの所有者間の関係性に対応させる思考方法である。したがってその定義は「輸血学の知識を利用することで、あらゆる人間を各々が所有する ABO 式血液型によって四つの集団（人種）に振り分け、ABO 式血液型間の交換関係を各集団間の関係性に対応させる思考」というものになる。この定義に相応しい名称は「血液型人間分類」<sup>(10)</sup>であるように思われる。

このように定義と名称を設定しなおすことで、血液型人間分類を「非科学」「疑似科学」「迷信」「俗信」「オカルト」といったカテゴリーから解放し、人間に適用される分類思考の一事例として考察することが可能になるだろう。

## Ⅶ おわりに

本稿ではこれまでの血液型人間分類の研究の問題点を指摘し、トーテミズムの解釈との比較を通して、血液型人間分類がレヴィ＝ストロースの主張す



るトーテム的分類の一事例であることを示した。また、その思考の成立には輸血学の知識が関わっていることを明らかにし、そのことをふまえて新たな定義と名称を設定した<sup>(11)</sup>。

これまでの研究で指摘されてきたように、血液型人間分類は経験主義的・実証主義的方法を基礎とするような科学的な思考ではない。それは数ある血液型分類<sup>(12)</sup>の中で ABO 式血液型分類のみが取り扱われてきたことを確認するだけで充分であろう。しかし、そのことが血液型人間分類の論理の薄弱さや研究価値の低さを意味するわけではない。

血液型人間分類は百年近くものあいだ多くの人々によって使用されてきた思考である。この事実から読み取るべきことは、科学的思考を用いることができないうために非科学的な思考に頼ってしまう人々が大勢いるということではなく、比喩を行う際に用いられるような、科学的思考とは別種の思考様式が存在し、それが多くの人々に支持されているということである。また、どちらの思考も一人の人間が使用できるという事実から、二つの思考様式は排除しあうものではなく、個人の裡に共存しうるものだというのも理解する必要があるだろう。

血液型人間分類のような、人々に広く支持される思考を研究対象とする場合には、まずはその存在を認め、科学的思考と同等の価値を与える必要がある。そうしなければ、その思考を用いる人々を科学的思考の劣位に置かれる迷信に騙される無知蒙昧な人々だと理解してしまうことになり、血液型人間分類に内在する固有の論理体系を看過してしまう。また、そのような理解によって、この思考が生みだしてきた日本社会における固有の歴史過程を捉えそこなうという結果をも招くことになるのである。

## 注

- (1) 心理学者以外の研究では医学者の研究があり、その研究では血液型と性格の関連性は、血液型学の見地からは認められないものと論じられている [高田 1994]。また以下で行う先行研究の整理では、心理学者以外の研究 (松田薫と溝口元の研究) も含めて論じているが、その理由はこれらの研究が従来の研究を整理する上で欠かすことのできないものであり、またその研究は心理学者の研究に強い影響を与えていると思われるためである。

- (2) 佐藤達哉は「心理学者による血液型性格判断についての諸研究は、“非科学的”あるいは“俗信”であるところの血液型性格判断を否定することに力点がおかれており、〈…〉ある意味で『最初に結論ありき』」[佐藤 1993: 198]だと述べている。これは既存の血液型論理を扱った研究の偏見を指摘するものである。そのように論じた後に、佐藤は、性格の尺度といった外的な基準から評価するのではなく、血液型論理に内在する論理をみいだす必要があると主張している。だが後述するように、そこで佐藤に採用されている方法から得られたものは、他の人間分類思考以外にもみいだされるような一般的な機能に留まっており、その論理の固有の形式を捉えそこなっている。論点を先取りしていえば、四番目の研究アプローチにもなう問題は、血液型論理以外の思考に確認できるような一般的な機能を血液型論理の使用にもなう固有の機能だと誤って理解している点にあり、そのことが血液型論理の偏見をますます助長する結果となっている。そのため、他の研究アプローチよりも問題の根がいつそう深いものとなっているのである。
- (3) 四番目の研究では、血液型論理の使用者にとってマイナスとなりうる側面について言及しない。しかし、血液型論理が差別やハラスメントを生じさせるものだと論じられる場合には、その側面が血液型論理の使用を禁止するための理由とされる [cf. 佐藤 1994]。つまり、批判者の捉える血液型論理の使用における利点と欠点は、それを肯定的に捉えようとする場合と否定的に捉えようとする場合とで使い分けられている。
- (4) この問題点については心理学者からも指摘されている。坂元章は血液型ステレオタイプの研究を概観し、これまでの血液型ステレオタイプの研究は「認知の歪みがあるかどうか」についてのみ論じており、血液型ステレオタイプのもたらす認知の歪みが血液型論理に対する信念を形成し維持しているのかということについてはほとんど検討されていないと指摘している [坂元 1994: 184]。この指摘から二十年近く経過した現在でも、管見の限りでは、そのような研究は行われていない。
- (5) 例を挙げると、先に扱った論文で詫摩と松井は、「神秘現象の信じ方」についても分析を行っている。神秘現象には、「星占い」「心霊現象」「UFOの存在」「ネッシーの存在」「神(仏)」「手相」「たたり」「迷信」「超能力」「血液型」が挙げられ、質問用紙の回答者から得たデータをもとに分析した結果、これらの「現象は、科学的興味をよぶ現象、占い類、信仰に関連する現象に分けられる。そして、「血液型は占い類の中に含まれて」おり、「血液型別の性格学は占いと同類のものを受けとられていると解釈できよう」と述べている [詫摩／松井 1985: 22-25]。しかし「神秘的現象」という、「非科学」あるいは「疑似科学(科学の振りをしている非科学)」のカテゴリーに収められるもののみで比較しては、批判者自身も「血液型論理を使用する者／使用しない者」という、血液型論理と同様の人間の類型化を行っていることに気づけず、それらを比較するという発想は生じないだろう。

- (6) 板橋は、血液型占い本に記載された「相性チェック早見表」という、恋愛関係と友だち関係の組み合わせが点数化された表を確認して、「恋愛でも友だちでも、相性が悪い組み合わせが二つあり、一つは同じ血液型で〈…〉もう一つは、AとB、OとABの組み合わせ」だと述べている〔板橋 2004：56；cf. マイバースデイ編集部 1996：4〕。また板橋は、別の本でも同様の相性が確認されることを指摘し、「二つの血液型占い本が、血液型と性格との関係を、ほとんど同じようにとらえていることがわかる。それは二つ以外の占い本をみても言える。どれもが、AとBを対立させ、OとABとを別の対立でまとめている」と述べる〔板橋 1994：59-60〕。この指摘には筆者も同意する。板橋は各血液型の相性の良い組み合わせについては論じていないのでその点を補足すると、相性の良い組み合わせは、相性の悪い二つの組み合わせ以外の二つのうちのいずれかの血液型との組み合わせになるわけであるが（Aの場合はOとABのいずれか）、管見の限りにおいては、その組み合わせには悪い相性のように固定された原理はみいだせず、血液型本によって異なっているように思われる。しかし、多くの場合、相性の良い組み合わせは重複することがなく、A型とO型の相性が良い場合は、B型はAB型と相性が良いというように、相性の良い相手が均等に割り振られていることが多いと思われる。
- (7) 以下では、各血液型の所有者の集団を指して「A型人種」や「O型人種」というようにに記述する。その理由は、後述するように血液型論理が全ての人間を四つの集団に分割することを基礎とした人種論であることを示すためである。
- (8) この血液型という新しい知識が人々に大きな衝撃を与えたことを示す資料があるので補足として挙げておこう。川上理一は1937年に発表した論文で、血液型論理の提唱者の方法論的な不備を確認せずに、実験結果からその仮説を検討しようとする研究者の態度を批判的に論じている。その論文の中で川上は、血液型の知識の人々の受容状況について次のように述べている。「人類の血液に四型あることは、我々の常識に取って、確に奇異なる感を与える。皮膚が白いとか、黒いとか〈…〉云うならば、先ず当たり前のことになっているが、血液の様な誰にも共通し、誰にも同じ役目を持つと思われるものが、人によって異っていると云うのだから、一寸不思議に思うのも無理はない。〈…〉血液と云うことになると、誰にも一様なものに見えるらしい。それが個体によって違うという云うことが分かったのだから、医学界のみならず、一般世人から少なからず注目を惹いた。〈…〉流行的に我も我もと研究を初め〈…〉血液型に関する資料や知見は瞬間に集り、異常な進歩を遂げた」〔川上 1994：48〕。この記述から、輸血学の普及以前には血液は万人が同一のものを所有していると思われていたこと、輸血学という新たな科学知識がその人間観に大きな変化をもたらしたことが読み取れる。この新しい知識は、例えば親と子が異なる人種に分類される可能性をはらむものであり、それが「血縁」によってつながる関係性に切断をもたら

すものであったことを考慮するならば、人々に与えた衝撃の大きさは計り知れないものであったことが推察される。

- (9) レヴィ＝ストロースはこの媒介の二つの方法を以下のような事例から説明している。北アメリカの隣接する二つの部族の神話では、もともと人間は火をもっておらず後になって入手したとされている。両部族では火の入手を説明する神話は異なっており、一方の神話では、もともと火は天上の世界にあり、地上の住民が天上の住民と争い、天上の世界から火を持ち帰ったとされる。しかし、隣の部族の神話では犬が人間に火をもってきたとされている。レヴィ＝ストロースによれば、前者は「天上」と「地上」の対立関係を、二項を近づけることでその対立の消去を図っており、後者は「自然の領域」と「文化の領域」という対立する二項の中間に位置する犬という家畜（動物だが人間に飼われている）が、火という「自然の領域」に属するものを「文化の領域」という人間の世界にもたらすことで、自然と文化の対立関係を克服しているという〔レヴィ＝ストロース 1979：78-79〕。
- (10) この名称は、血液型人間分類を批判的に論じた雑誌記事で使用された「人間分類ゲーム」〔遠藤 1985：86〕という表現を借用して作ったものである。
- (11) 本稿では日本国内で確認できるトーテムの分類について論じてきたが、本稿と同様に日本人に身近なトーテムの分類について詳細に論じているものに小馬徹〔1995、2011〕と徳田真帆〔2010〕の研究が挙げられる。
- (12) 高田明和は「血液型は〈…〉公的に認められているものだけでも四〇種類以上あり、現在〔1994年〕自称、公称を加えると四〇〇種類以上〈…〉あるとされる」〔高田 1994：163〕と述べている。

## 参考文献

- 板橋作美 2004『古いの謎—いまも流行るそのわけ』文春新書
- 遠藤 健 1985「科学のニオイをふりまく人間分類ゲームの正体」『朝日ジャーナル』27-9：86-88
- 大村政男 1998『血液型と性格』新訂版、福村出版
- オフェリア・麗（監修）2009「あなたの潜在能力と恋愛傾向は？ 血液型×脳タイプで完全判明！」『an・an』1671：22-39
- 川上理一 1994「実験万能主義を排す—血液型と気質」『現代のエスプリ』324：48-52
- 菊池 聡 1999『超常現象の心理学—人はなぜオカルトにひかれるのか』平凡社新書
- 小馬 徹 1995「幼稚園のトーテムズム—日常生活の文化人類学のための序説」『歴史と民俗』12：215-241

- 2011「幼い娘がしてくれた構造人類学のレッスン—レヴィ=ストロースの贈り物」出口顯編『読解レヴィ=ストロース』青弓社、280-297頁
- 坂元 章 1994「血液型性格判断と認知の歪み—これまでの社会心理学的研究の概観」『現代のエスプリ』324：177-186
- 佐藤達哉 1993「血液型性格関連説についての検討」『社会心理学研究』8-3：197-208
- 1994「ブラッドタイプ・ハラスメント—あるいはABの悲劇」『現代のエスプリ』324：154-160
- 佐藤達哉（サトウタツヤ）／渡邊芳之 1991「血液型性格関連説と人々の性格観」『人文学報』223：159-174
- 1992「現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究」『心理学評論』35-2：234-268
- 2005『「モード性格」論』岩波書店
- 高田明和 1994「血液型から見た血液型と性格の関係への疑義—血液型…発見から最新知識まで」『現代のエスプリ』324：161-167
- 詫摩武俊／松井 豊 1985「血液型ステレオタイプについて」『人文学報』172：15-30
- タダモ、ピーター・J 1998『タダモ博士の血液型健康ダイエット』濱田陽子訳、集英社文庫
- 徳田真帆 2010「ジャニーズファンの思考」『くにたち人類学研究』5：21-46
- 能見俊賢 1983『血液型おもしろ第二読本』文化創作出版
- 1998『【血液型】おもしろ読本』青春出版社
- マイバースデイ編集部編 1996『恋もまる見え！ 血液型占い』実業之日本社
- 松田 薫 1991『「血液型と性格」の社会史』河出書房新社
- マリノフスキー、B 1997『呪術・科学・宗教・神話』宮武公夫／高橋巖根訳、人文書院
- 溝口 元 1986「古川竹二と血液型気質相関説—学説の登場とその社会的受容を中心として」『生物科学』38-1：9-19
- 1987「軍隊と血液型気質相関説」『生物学史研究』49：19-28
- 1990「智能・学業成績と血液型気質相関説」『生物学史研究』52：33-42
- 1994「昭和初頭の『血液型気質相関説』論争—古川学説の凋落過程」『現代のエスプリ』324：67-76
- 村上宣寛 2008『心理テストはウソでした』講談社
- 読売新聞 1943「血液は何型ですか いざの時に役に立つ ぜひ知っておきましょう」『読売新聞』5月21日朝刊4頁
- ラドクリフ=ブラウン、A・R 2002『未開社会における構造と機能』青柳まち子訳、新板、新泉社

レヴィ＝ストロース、クロード 1970『今日のトータリズム』仲沢紀雄訳、みすず書房

———— 1976『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房

———— 1979『構造・神話・労働』大橋保夫編、三好郁朗他訳、みすず書房